

# 外國貿易と價值法則

町 田 實

## 一 ま え が き

近代經濟理論は價值論を排除する。國際貿易理論においても價值論を持ち込むことは不必要な混亂を招くだけで何らの解決を齎すものではなく、國際經濟問題の解明は價格によつて現象する均衡分析をもつて事足りると考えられている。勿論、そこには多くのニュアンスはあるのであるが、このような立場の批判は別として、果して價值論は無用の長物と化したのであるか、それとも現實分析における不可缺の武器たるを失わないといえるか。この本質問題の解明がなお理論の出發點として残されている。

先ず、考へ得ることは、資本主義が歴史的範疇の一體制であり、外國貿易がその必然的結果であるとともに、その前提條件であるとすれば、この體制を支配し、またこれをよりよく把握するための理論は自ら歴史的性格を帯びざるを得ないわけであるが、かかる要素を意識して構成されてこそ、より、高次の段階に發展しうるものではなからうか、ということである。科學としての經濟學が價值論の分析に端緒を見出したということは周知のところであるが、現實の經濟現象の政治社會による偏向や、世界經濟の現段階がそれぞれ發展段階を異にする各種經濟體制の複合體であるという事情を考慮するとき、このことだけから推論するも、主觀的價值論のみによつて經濟現象のすべてを解明することには多くの困難が感ぜられるであろう。經濟現象のうちに潜むところの人間關係、社會關係を豫想するとき、既

に客觀的價值論の必要性が主張される論據が存在するといえよう。

客觀的價值論による國際貿易關係の分析は既に名和統一氏によつて試みられていたのであるが、戦後、氏が新裝をもつてものされた勞作「國際價值論―不等價交換説」は理論的に多くの問題を提供しているばかりでなく、特にわが國の現實の事情から切實な關心をもたれるのである。問題は、さきに平瀬巳之吉氏によつて、かなり苛酷な批判がなされたのについて、最近また近代理論に造詣深い赤松要氏によつて批判の對象として取上げられるに至つて異常な注目をひいたのである。また他面、このことは、近代理論とマルクス理論との本質問題の對決としても、その現實的意義からしても極めて興味ある問題たるを失わないであらう。

われわれはここで一應客觀的價值論の立場から、問題の所在を検討するとともに、各種前提條件を整理し、今後における理論的發展の足場を見出しうればと思ふのである。

## 二 外國貿易の前提としての資本主義

### (1) 資本主義の成立と價值法則

資本主義が外國市場を求めて國際的規模に擴大したのは單なる偶然ではなくして、資本主義それ自體の本質的な原因によるのであるが、これを追求することは、外國貿易―外國市場の研究に不可缺の前提をなすといえよう。

元來、商品經濟發展の歴史は内在的には社會的分業と所有形態の進化に基礎をもつてゐる。資本主義は一定の社會的分業の發展―手工業の農業よりの分離とその結果としての手工業生産の著しい發展・都市と農村との分離・商品交換の増大・各種生産部門の増加・商人階級の登場―を契機として出現し、益々各種企業の特門化を促進するとともに各種部門間の生産物交換を擴大させる(註)。國內各地方間の交易は生産方法の不斷の改造と生産規模の無制限の増大に

よつて不可避免的に國家の境界を越えて進出するのであるが、事實、歴史的には、かくして十五世紀から十六世紀にかけての地理上の發見に伴い資本主義は、既に巨大なる國際貿易の活況に際會したのであつた。國際貿易は世界貿易へと轉化し、世界市場の形成を見たのである。しかし乍ら、かかる資本主義の横への發展は一率に相互に均等に擴大するわけではない。「社會資本の再生産の理論によつて必然的に前提され且つ實際唯だ一系列の絶え間のない動搖の平均結果としてのみ現われるに過ぎない・社會的生産の個々の部分相互間の均衡（價值並に自然形態からみての）——この均衡は、資本主義社會においては、個々の生産者が孤立していて、茫漠たる市場を目當に生産する結果、絶えず破壊される。相互に「市場」として役立ち合う相異なる工業部門の發達は不均衡であつて、相互に優越を爭う。そして他に比して一層發達した工業は國外市場を索める。」資本主義の發展は國際的には諸國間の生産力段階に不均等を齎すとともに、國內的には、各産業部門間に發展の不均等が豫想されているのである。もしも資本主義生産があらゆる部面において同時にかつ均等に發展せねばならないとしたら、總じて資本主義生産なるものは不可能となるのである。いいかえれば、資本主義のかかる發展の不均等性こそ、また市場擴大への衝動となつて現われるのであつて、ここに資本主義社會における外國貿易に反映する特殊性が潜んでいる。だから、かかる前提を忘れた外國貿易論は問題の本質に觸れることが出来ないであらう。そこでもう少しこの點を考えて見よう。

【註】 リヤザノフ編「ドイッチェ・イデオロギー」三木清譯岩波本一三五頁

## (2) 外國貿易の論ぜられる「場」について

世界經濟はいうまでもなく單なる國民經濟の擴大として平面的に國境を超えた經濟の統一的組織體として存在するわけではない。それは、それぞれ不均等な發展段階にある資本主義諸國が——現實には社會主義諸國も入るが——並列的に別個の經濟的組織體をなし、それらの相關連し合つている一つの「場」なのである。それらを結ぶ諸關連は歴史的に

規定され、偶然に起るものではない(註1)。さて、かかる發展段階を異にする諸國民經濟をむすぶ紐帶として、これらを媒介するものが外國貿易という交易現象であり、その現象形態と作用を研究するのが國際貿易論の本來の目的であり、いわゆる「國際價值論」は、これを資本主義社會の價值法則から検討し解明しようというのである。外國市場論は外國貿易の現象する「場」を研究對象とするものと考えられる(註2)。

近代理論による國際貿易論は、具體的な資本主義社會は捨象され、交易現象にとりなう社會關係―政治關係は價格の中に解消される。商品分析に出發し、資本主義的社會諸關係を前提とする場合、國際貿易論は抽象的な商品交換關係の分析から始まるけれども、具體的な價格現象の把握は資本主義的生產の總過程の中に抽象化を通じて價值關係にまで遡る操作によつてのみ可能であらう。國際貿易の現象を如何に抽象化しても商品交換の現象よりさきに遡ることはできないのであつて、これを純粹に物々交換の關係にまで解消して考えることは、その道筋を失うことになるであらう。古典派の一つの缺陷はそこにあつたし、この點近代理論もまたこれを踏襲するものと考えられる。

「資本主義的生產は、價值の上にまたは生産の上にまたは生産に含まれている労働の社會的労働としての發展の上に根柢を置いている。しかし、この事は外國貿易、並に世界市場の基礎の上に於てのみ可能である。それ故、それは資本主義的生產の結果であると同じく前提でもある」(註3)。

まさに述べた如く、資本主義生産は外國貿易および世界市場と不可分離的關係に立つのであるが、外國貿易―世界市場の發展によつてのみ、貨幣は世界貨幣に、抽象的労働は社會的労働となるのである。このことは重要である。外國貿易と價值法則の關係の全祕密の鍵はここにあるからである。

ところで、外國貿易は總價值の關係から、價值通りの交換が行われるとすれば、單に使用價值と他の使用價值との代置、現物形態の代置を意味するだけであり、一般に社會的生產物實現の法則とは關係がない。だから一般に價值實

現の問題に關連しては外國貿易は捨象されるのである(註4)。

かくて、外國貿易論は、まず商品の價值分析から出發し、單純再生産の場合における諸國間の商品交換の現象形態ならびに諸法則を研究し、しかる後具體的に擴大再生産過程における問題の總合的把握に進むべきものと考えられる。

(註1) 世界經濟の「場」それは個別國民經濟の發展によつて異なりうる。したがつてわれわれの論ずる世界經濟が如何なる發展段階を問題とするかによつて、具體的内容は異なつてくるのである。しかしこのことは理論構造が變化することを意味するものではないであらう。

(註2) 貿易理論の對象としては古典學派をその始祖とする限り近代理論においても別個なものではあり得ない。ただし、ここでは「國際價值論」が近代理論においては單一世界の想定の下における價格均衡論であるという點に問題がある。

(註3) 「剩餘價值學說史」第三卷 邦譯三〇五頁

(註4) 「資本論」第二卷 高畠譯四二九頁參照。

### 三 國際交換關係の價值分析

#### (1) 國際交換の價值論的把握とは何か

國家を抽象化して單なる地域概念とし、國際貿易を國際價格の數學的・函數關係として把える説明は、一般に近代理論の特徵的な方法である。そこではリカードによつて構想されたいわゆる比較生産費の解釋を繞つて幾多の試みがなされているが、いずれも勞働價值説の修正ないし排除の上に理論構成がなされている。しかしながら、その性質上比較生産費説は完全に放棄することは出來ず、一應問題は靜態分析の範圍内においてその可能性を説明するものとされているのである。

しかるに、われわれは外國貿易に關するリカードの構想が彼の價值論の體系から如何に理解さるべきか、彼の價值

論を更に追求するときその論理の限界と混迹がどこにあるかの検討から始めようというのである。

さて、リカードは貿易論の一提言として、「一國內において諸貨物の相對價值を支配する同じ規則は、二國もしくはそれ以上の國の間に交換せられる諸貨物の相對價值を支配するものではない。」(註1)といい、これが設例としていわゆる比較生産費説が説かれている。即ち

	イギリス	ポルトガル
ブドウ酒一單位の生産に要する労働量	一二〇	八〇
ラシヤ一單位の生産に要する労働量	一〇〇	九〇

「ポルトガルがイギリス産ラシヤと交換に與うべきブドウ酒の量は、兩貨物ともにイギリスもしくはともにポルトガルに於て製造せられた場合に於けるが如く、各貨物の生産に投ぜられたそれぞれの労働量に由て決定せられるものではない。」(註2)

「ポルトガルに取つてはラシヤと交換にブドウ酒を輸出するのが有利であろう。この交換は、ポルトガルの輸入する貨物が、ポルトガルにおいてイギリスにおけるよりも少量の労働をもつて生産せられる場合においても、なお矢張り行われうるであらう。何となれば、ポルトガルにとつて、その資本の一部分をブドウ栽培からラシヤの製造に割いて生産しうべきよりも一層多くのラシヤをイギリスから交換し來るべきブドウ酒の生産にその資本を投ずる方が一層有利たるべきをもつてである。」(註3)

リカードは更にこれを補足説明して、かような交換は一國內の個人間では行われ得ない筈だ。けだし、イギリス人一〇〇人の労働はイギリス人八〇人の労働と交換せられる筈がないからである。しかるに國際間において、これが可能なのは、労働資本の國際間では移動することの困難なる事情が存するためであるとリカードは説明する。ここで

彼が國家を單なる抽象的概念とせず、現實の政治的、經濟的構成體として具體的に關連させていることは正しい。(歴史的的概念としてこれを見てはいないが)。問題はそこでこれらの諸國間の商品交換關係―價值關係の分析である。

さて、いうまでもないが、商品は使用價值及び交換價值という二つの對立物の統一である。一方では各種商品は異質物として現われるが、他方では質的に同質的なもの―交換價值として表示される。使用價值は使用あるいは消費によつてのみ自らを實現するのであるが、その使用價值が相互に交換されうる一定の比率―量的割合は交換價值を表わす。それは今や机でも家でもなく、何らの有用物でもない。感覺的に知覺されうるそのすべての屬性は消失しておりそれは單なる個性の消えうせた均等な勞働生産物の一定量でしかない。いいかえれば、ここでわれわれに認識しうるのは、抽象的人間勞働の量的表現だけである。國際貿易の行われる「場」においてそれは社會的必要勞働に轉化する。

リカードの設例についていえば、二國における二商品の價值が抽象的人間勞働の量的表現として示されているだけであるから、ここではイギリスにおいてはブドー酒五單位とラシヤ六單位とが交換され、ポルトガルにおいてはブドー酒九單位とラシヤ八單位とが交換されているということしか理解しえないのである(註4)交換價值の背後に潜む本質は何ら示されてはいない。諸商品の價值の大小は、それらが同一の計量單位に還元された後に初めて量的に比較されるのであるが、これは商品と貨幣との關連を追求するとき初めて可能となる。尤もリカードも貨幣を問題としていないわけではないが、彼はただこれを價值の尺度―商品交換の媒介物としてみているに過ぎず、交換價值の現象形態たる本質を理解していない。

そこで、これら兩國の間に商品交換が行われるとすればどういうことになるか(註5)。

リカードは兩國における二商品の生産費比率の關係から、直觀的にポルトガルはラシヤと交換にブドー酒を、イギ

リスはブドー酒と交換にラシャを輸出することになるであろうと結論する。ポルトガルの八〇労働日がイギリスの一〇〇労働日と交換されるという限りにおいて、それは價值法則のモディフィケーションであろう。しかし、勿論このことはただちに不等價交換を意味しない。マルクスが「學說史」の中の短文において「リカードの理論を觀察してさえも……」といった意味は、なお彼の價值論に遡つて理解しなければならぬものを含んでいる。

リカードがまた別に提言して「一切外國品の價值はこれと交換せられるわが國の土地及び労働の生産物の數量によつて測定せられる」というとき價值論の俗流化に據りどころを與えているが、けだし彼が價值の分析を怠り、外國貿易は使用價值のみに關するとしたことから來る當然の結論であつて、彼においては價值形態は全く解つていない。だからリカードは市場價格を考察するとき「獨占の目的物でなければ輸入品における賣價を左右するものは輸出國におけるその自然價格であるというに盡きる」(リカード、原理、岩波本三七〇頁) と考へるのであるが、この自然價格が外ならぬリカードのいう價值なのである。

しかしマルクスにおいては一般に「ある機械の交換價值は、その機械によつて置きかえられる労働時間の分量によつて規定されているのではなくて、その機械自體に支出されているところの、したがつて同一種類の新しい機械を生産するに要するところの労働時間の分量によつて規定されている。」(註6)であり、また「もしも諸商品の生産のために必要な労働の分量が依然として不變であるならば、それらの商品の交換價值は變動しないであろう。……労働の生産力が増加すれば労働は同一の使用價值をより短い時間で生産する。労働の生産力が減少すれば、同一の使用價值を生産するためにより多くの時間が必要となる。だから、一商品に含まれている労働時間の大いさは、したがつてその交換價值は、一つの變化する大いさであつて労働の生産力の増減に逆比例して増減する。」(註7)即ち、交換價值は變化するものとして把えられているのであつて、このような説明は「資本論」その他においても明確なかたちで一貫して



みられる(註8)。要するに、労働生産性の變化を考慮すれば、商品の價值は、その生産に直接投下された労働量によつて規定されるのではなく、新たな條件の下に同一商品が再生産されるに要する社會的必要労働が、これを決定するというのである。國內における時間的變化という條件は、國際間における空間的隔りという條件に置きかえることによつても妥當するとすれば、われわれは國際間において交換價值の異なる理由を理解することが出来る。

さて、リカードの設例に歸つてこれを適用すれば次の如き推論が成立するであらう。即ち、ブドー酒一單位と交換にポルトガルの輸入するイギリスのラシヤ一單位の價值は、一〇〇労働量ではなくポルトガルでそれが再生産されるに要する九〇労働量をもつて表示されるということである。價值通りの交換が行われるとすれば、ポルトガルはブドー酒一單位八〇労働量と交換にラシヤ一單位九〇労働量の價值を獲得したことになる、この場合ラシヤとブドー酒の交換比率は八對九となるであらう。然るに、イギリスの側からみれば、ブドー酒一單位の價值は、ポルトガルにおける八〇労働量によつてではなく、一二〇労働量を含むものとして計量される。この場合、價值通りの交換が行われるとすれば、兩商品の交換比率は六對五となるであらう。であるから、これらの交換關係は兩國のうち、どちらの側に觀點を置くに從つて事情は異つてくると考えられる。現實には二商品はそのうち輸出商品一つに特化するというやうなことはあり得ないのであるから、均衡論でいうところの特化すれば、ということは今のところ問題ではない。

ここで問題を更に解り易くするために、兩商品の價值關係を次の如く書き改めることが許されるであらう(註9)。

イギリス      ポルトガル

ラシヤ

五四

四〇

ブドー酒

四八

四八

即ち、ポルトガルのブドー酒四八單位がイギリスのラシヤ五四單位と交換されるとき、それは相對的價值形態にあ

るポルトガルのブドー酒四八單位が、等價形態にあるイギリスのラシヤの使用價值量によつて表現されるということ、いいかえれば、ポルトガルにおいて一單位八〇勞働量の單なる凝結物たるブドー酒は九〇勞働量を體現するラシヤによつて示現されるのであるが、それはまた一度イギリスに輸出されるとき、その等價物たるイギリスのラシヤの使用價值量によつて表現されるということである。だから、輸出ブドー酒にとつて、等價形態にあるこのラシヤの五四單位という使用價值量だけが唯一つの價值表現なのである。まさに、木下氏が指摘する如く、「ポルトガルのブドー酒所有者はこの輸出によつて一四單位のラシヤに相當する超過所得を獲得しえたといふことの裏には、ポルトガルの九〇勞働量がイギリスの一〇勞働量と等價において交換されているといふ事實があることが表現されずに終つてゐる。そして兩國間の國民的勞働の間の不等價交換は、單に超過所得一四單位のラシヤとしてより以外の現象形態をもたないのである。」(註10)

マルクスが、「リカードの理論を觀察してさへも一國の三勞働日が、他國の一勞働日と交換されうる」といつた意味は、二國における交換價值の相互關係を理解することによつて略々明確なのであるが、まだ、價值法則の本質的なモディフィケーションの説明としては不十分であることを免れない。われわれは、更に「學說史」の一文で「いいかえれば、一國內において高級勞働（熟練勞働）、複雑勞働、低級勞働（不熟練勞働）單純勞働に對して有するのと同じような具合に、異なる諸國の勞働日は相互に關係し合つてゐる。……」といつてゐるところを考察するとともに、貨幣の本質を分析することによつて以上述べた關係をより明確ならしめることが出来るであらう。

(註1) リカード「經濟學及び課税原理」、小泉譯岩波本一一八頁

リカードがここで相對價值といふのは、價值一般の質とは無關係に價值量を意味してゐるに過ぎない。

(註2) リカード前掲書一一九頁

(註3) 同上 一一九—一二〇頁

(註4) 木下悦二氏「國際交換の價值法則について」(經濟評論二十五年三月號)

(註5) ここではまだ貨幣の問題は捨象される。

(註6) マルクス「經濟學批判」宇高氏譯四五頁

(註7) 同上

(註8) 「剩餘價值學說史」第三卷邦譯二七五頁

「資本論」長谷部譯第十分冊一二三頁

(註9) 木下悦二氏前掲論文

(註10) 同上

## (2) 諸國における國民的勞働の相互關係

マルクスが「學說史」第三卷において、一國の三勞働日が他國の一勞働日と交換しうるとし、この關係を「換言すれば一國內における高級勞働と低級勞働との關係と同じような具合に」といつているのは、いうまでもなく比喩なのであるが、この點に關する限りでは一國內の問題としても國際間の問題としても變りはない。名和統一氏も「國際間で一國の一勞働日が、他國の三勞働日と交換されるという場合、一國の一勞働日がその實質において複雑勞働、倍加された單純勞働であるならば、この場合においても價值法則のモディフィケーションはない。」(註1)とされ、赤松要氏もこの點については問題はないと同意されている。ところで、名和氏は「その逆が行われるとき(一國の複雑勞働が他國で單純勞働として交換される)、そこに價值法則のモディフィケーションがあり、ここに現實の問題性がある。」と指摘される。最初に異論の存在するのは、この點についてであつて、これが第一の問題點である(註2)。

ここで問題は諸國における國民的勞働の差異の相互關係として把えられねばならないのであるが、これを理解する

鍵はまず「資本論」第一卷第二十章の「勞賃の國民的差異」なる一章を擧げることが出來よう。しかし、そこではなお問題は價值論の抽象的段階の分析に止まり、資本主義的生産の總過程の問題として扱われてはいない。だから、諸國民の生産力段階の差異が前提とされながらも、競争の條件の下における價值——市場價值・生産價格——の問題は思惟の過程から除外されているのである。

一般に複雑勞働はただ自乘された、あるいはむしろ倍加された單純勞働に過ぎぬものと看做され、例えばある少量の複雑勞働はある多量の單純勞働に等しいとされているのであるが、價值分析の過程においてはすべて單純勞働に還元される。それは如何にしてであるか。それはすべての種類の勞働がその共通の基礎たる人間勞働一般に還元されると同様に客觀的な過程であり、經驗がそれを示しているのであり、商品生産がこれを條件づけている。ところで、社會的平均勞働と較べてより、高度なより、複雑な勞働たる意義をもつ勞働は、より、高い養成費がかかっているところのその生産により、多くの勞働時間を要するところの従つて簡單な勞働力よりもより、高い價值をもつところのある勞働力の發現である。だから、もし勞働力の價值がより、高いならばその勞働力はまたより、高度な勞働によつて發現し、従つて同じ時間内に比較的により、高い價值において對象化されるのである。そこで問題は、勞働力の價值がより、高いならば——複雑勞働力は——勞働力の價值のより、低い——簡單な勞働力に比しより高度なる勞働となつて現われ、より大なる價值として對象化されるという點にある。

一國內においては一般に資本制生産社會に機能する勞働は單純勞働としてのみ考えられ、複雑勞働は捨象されるのであるが、生産力段階の異なる諸國間においては、各國の勞働はまた別の色彩をもつ。

「各國には一定の中心の勞働強度と見なされるものがあつて、その強度以下では勞働はある商品の生産に際し、社會的に必要な時間以上を消費し、したがつて標準的な質の勞働としては計算に入らない。與えられた一國について

いはば、國民的平均以上に高い強度のみが、單なる勞働時間の長さによる價値の秤量に變更を加える。〔註3〕

ところが、個々の國がその構成部分をなす世界市場では、中位の勞働強度が國によつて異なるのであつて、「これらの種々の國民的平均は、一の階梯をなし、その度量單位は世界的勞働の平均單位である。したがつて、強度のより大きい國民的勞働は、強度のより小さいそれに比すれば、同じ時間により、多くの價値を生産し、この價値はより多くの貨幣で表現される。〔註4〕

即ち、各國には夫々平均的な中位な勞働強度というものが考えられ、それは夫々に異なるのであるが、この際、複雑勞働力の關係において見た如く、強度のより大なる國民的勞働はより、小なるそれに比して同一時間により、多くの價値を生産する。ここで國際間においては世界的平均勞働なる尺度が考えられていることは注意を要する。さて、もう二、三引用しよう。

「その國際的適用において、價値法則に更により、以上の修正を加えるものは、より、生産的な國民が、その商品の販賣價格を、その價値まで引下げることを競争によつて強制されない限り、世界市場ではより、生産的な國民的勞働が同時により、強度の大きい勞働として計算される、ということである。〔註5〕

「一國において資本主義的生産が發展していれば、それと同じ程度において、そこでは勞働の國民的強度及び生産性も國際的水準以上に高くなつてゐる。したがつて、異なる諸國で等しい勞働時間に生産される同種商品の異なる分量は、不等の國際的價値をもち、これらの價値は種々に異なる價格をもつて、すなわち國際的價値の如何に應じて異なる貨幣額をもつて表現される。〔註6〕

さて、ここでは條件づきではあるが、價値法則の修正が行われることが論及されている。今は、競争の問題は捨象されているのであるから、一應概念として成立せる世界的勞働——から秤量するときより、生産的勞働はたとえ單純勞

働であつてもそれがより、強度な大きい價值を生産するものとして計算されるというところに問題があるとしたのである。競争の條件を入れた場合はより、具體的な段階として別に論じなければならぬ。ともかく、同一時間における生産力の高い國の單純勞働の生産物とその低い國の複雑勞働の生産物とを比較すれば、國際的價值において前者はより大きいもの、後者はより小さいものとして現わされるであらう。この點、明かに價值法則のモディフィケーションでなければならぬ。

ところで、以上主として勞働強度という觀點から説明されてきたのであるが、勞働生産性については、前掲文においても、ただ附隨的に「勞働の國民的強度及び生産性」と全く同じ水準で論ぜられているに過ぎず、特別に取り立てて問題とされてはいない。しかしこれは更に問題が複雑であるように思われる。この關係は後に利潤率が問題とされる段階において取上げられるであらうが、今は、ただより單純なる形態において把握し、具體化への足場を見出さんとするだけである。

(註1) 名和統一氏「國際價值論研究」

名和氏はここで本來的な複雑勞働と擬制的複雑勞働に分けている。

(註2) 早稻田商學第八十七號摘稿

(註3) 「資本論」第一卷、高島譯第二分冊五四五頁

(註4) 同上

(註5) 同上五四六頁

(註6) 同上

### (3) 勞働生産性の國際交換に及ぼす影響

以上においては國際間における國民的價値の諸關連を勞働の強度—能率という點から觀察したに過ぎない。更に、われわれは勞働の生産性（いわば、生産物量と支出勞働量との關係として表わされる）が國際交換關係において持つ役割に論及しなければならぬ。

さて、國際間における國民的價値の差異は、同時にその變動過程において考察の對象とされなければならないが、それは諸國における勞働生産性の差異及び個々のその變動に依存するからである。要するに國際貿易は勞働生産性との關係において動態的は價值關係を意義づけるのである。まず、現實に現象する問題は、個々の商品生産について勞働生産性が國際的に相異なり、他方各國において全生産部門における平均的な勞働生産性が國際間において相異なる場合として考察される。

一單位商品の價値の大きさは對象化された勞働の量を表現するとすれば、この量の増大はそれに對應する價値の増大を、また逆にその減少はそれに對應する價値の減少を惹き起す。そしてその價値はまた同時に勞働の生産力の水準—勞働生産性によつて規定される。即ち、勞働生産性が高ければ高い程、一單位商品に對象化された勞働は小さく、それが低ければ低い程、對象化された勞働は大である。かくして、勞働生産性は價値の大きさに逆比例するのである。

ところで、勞働生産性もまた「多種多様な事情」によつて規定されることはいうまでもない。即ち、それは、勞働者の熟練の平均水準、科學の發展とその技術的應用の水準、生産過程の社會的組織、生産手段の範圍および作用能力その他自然的諸條件によつて規定され、これら諸要因（社會の生産諸力）の變化に應じて、いいかえれば、時代と國を異にするにつれて、その水準を異にするのである。ここで次の如き因果關係が生ずる。即ち、社會の生産諸力の變動は勞働生産性の變動をよびおこし、勞働生産性の變動は價値の大きいさの變動（逆の）をよびおこすのである（註）。

生産諸力の構成が異なり、勞働生産性が異なるとき、「異なる諸國で等しい勞働時間に生産される同種商品の異な

る分量は、(勞働生産性が高ければ高い程、同一時間の勞働でより多くの使用價值を生産し、一單位當りの價值はより小さい) 不等の國際的價值をもち、これらの價值は種々に異なる價格をもつて、すなわち國際的價值の如何に應じて異なる貨幣額をもつて表現される。」のであり、兩者の交換過程において價值法則のモディフィケーションがここのである。換言すれば、生産諸力の構成を異にし勞働生産性の相異なる二國が等價にて商品の交換を行う場合、他の諸條件にして變りなければ、勞働生産性の高い一國の商品は、その低い他國の商品に比し、對象化された價值が小であらう。即ち、國際的價值において等價なるものが、國民的價值において不等價となるという關係が成立するのである。しかし乍ら、現實にこのことが直ちに搾取關係を意味するかどうか明瞭ではない。後に觸れるべきところであるが、勞働生産性の高い國では搾取率は大きく、低い國では小さいのであるが、世界市場での兩者の接觸によつて生ずる剩餘價值は相對的剩餘價值と規定さるべきものであり、勞働生産性はこれと正比例して増減する關係にある。

さて、勞働生産性各個生産部門間において異なると同時に、その綜合としてみたる平均水準としての、いわば國民的勞働生産性は、各個別生産部門の勞働生産性とは常に異なるであらう。しかし、それらの間には絶えず平準化の作用もまた存在するばかりでなく、一國內において生産諸力の變動は常に各種生産部門間の新なる生産諸力の分配關係に影響する。例えば、同種生産部門間においては、平準化を他種生産部門間では(例えば、農業部門と工業部門)夫々異なる生産諸力の再分配をひきおこす、かくして、生産部門間の勞働生産性は常に異なることになるのである。

いま、A、B兩國間において、勞働生産性はそれぞれに異なるが故に、A國の一勞働日はB國の三勞働日に等しいという國際的價值關係が成立つとしよう。ところで、ある商品はA國においては二勞働日を要し、B國においては一〇勞働日を要するとすれば、國際的價值がこの商品については、A國の方がB國よりも低いことになる。國際交易關係においてはA國の商品がB國に輸出されれば、B國の價值に換算されるのであるから、ここに明かに不等價關係が



成立するであらう。この關係は勞働者とは無關係になり立つ。この問題は更に超過利潤を問題とする段階において總括的に研究されねばならないが、「資本論」第三卷において「有利な位置にある國は、より少量の勞働を與えてより多量の勞働を受けるのだが、この餘剰は勞働對資本間の交換一般の場合と同じく、ある一定の階級の懷に歸する」といつているのはこの關係を指すものであらう。

(註) ローゼンベルク「資本論註解」第一卷第一篇參照。

#### 四 貨幣との關連において見たる國際價值

##### (1) 貨幣の相對的價值

比較生産費說によつて國際貿易の關係を物々交換的に例證したりカードは、そのすぐ後の所で、これらの關係も決して貨幣の媒介なくして行われるものではないとしているのであるが、そこで、彼は外國貿易はその國でより多くの量の金に對して賣れるものを輸入するのであり、一國における貨幣量の増減はその國內生産物價格の騰落に影響するばかりでなく、かくして國際交換を可能ならしめると考へている(註1)。彼は「一國において使用せられべき貨幣量は、その價值によつて決せられざるを得ぬ。」(註2)といひながら、同時に價值觀の混亂、貨幣及び銀行券の概念的混同から一種の貨幣數量說に墮している。われわれはまず、かかる概念の明確化から出發しなければならぬ。

さて、周知の如く、資本制生産社會における流通の形式は  $W - W$  ではなく  $W - G - W$  をもつて表わされる。かかる形式のうちに貨幣の本質を明かにすることは、また後に價格現象の正しき把握に導くことになるのである。ここでわれわれは、貨幣の流通を生ずるものは商品交換であつて、商品の運動を決定するものが、貨幣の作用なのではないということに注意しなければならぬ。貨幣は流通の原因ではなくて、流通の手段なのである(註3)。商品が價值尺度と

流通手段との統一として一般等價物となるとき、それは貨幣と呼ばれるのであり、歴史の一定の段階においてそれは金によつて表現されることとなつたのである。すなわち、金は一商品であるとともに一般的等價物として貨幣となつたのである。だから、金はそれ自體一定の労働時間の體化物であるとともに、諸商品の價值をその使用價值によつて相對的に表現する。

さて、國際交換はA國の一商品がB國の貨幣と交換され、またA國の貨幣がB國の一商品と交換されるという一連の關係に定式化することが出来る。A國の一商品の價值はそれがB國において再生産されるに要する社會的必要労働によつて計算されるのであるが、B國における該商品の價值はその一般的等價物としてのその國における貨幣によつて換算される。B國における貨幣價值は同國において金に體化されているところの一定分量の労働時間によつて表示される。金は價值の尺度として同時に交換手段として貨幣となり、諸商品の交換價值は貨幣（金）によつて表現されるとき價格となるのであるから、ここにA國の一商品の交換價值はB國における貨幣の表示する價格によつて表現されるわけである。逆にB國の一商品がA國に輸出される場合においては、その價值はA國における貨幣の表示する價格によつて表現されるということになるであらう。そこでA國のX商品とB國のY商品とが等價として交換されるときならばどうなるか。問題は兩商品の價值を表示せるA、B兩國の貨幣の相對的價值が分析されなければならないことになる。X、Y二商品が交換される關係はそこに集約されているのだから。

世界市場においては一般に貨幣としての金は流通手段ではなく、一般的交換手段―購買手段または支拂手段という形態をとるのであるが、それは地金―單なる貴金屬として普遍的性格を帯びる。換言すれば、貨幣は世界市場に入つたとき、始めて完全な現物形態が同時に抽象的人間労働の直接社會的なる實現形態であるところの商品として作用するのであつて、相等しき國際的價值を表示する。かくして金は世界市場においては貨幣として一般的等價物であるが

同時に諸國において相異なる價值關係が對象化されているという特殊な性格を帯びてくるのである(註4)。だが貨幣は流過程ではそれ自體を増大させることはできない。従つて貨幣の所有者は最初の商品よりもより、大なる價值をもつ如き商品を見つけないならぬ。かかる商品こそまさに勞働力であらう。貨幣がこの勞働力を手に入れるとき、それは資本に轉化するのであるが、單純な商品貨幣流通の段階でこれを扱うことは不充分を免れない。ここでは剩餘價值の源泉が國際交換關係においても流通の中にあるわけではないことを指摘するに止める。

さて、貨幣の相對的價值の相異から來る現象形態は如何にして把握しうるか。上述の如く、凡ての商品の價值は一單位の金によつて置き換えられ、諸國において相異なる相對的價值をもつて従つて相異なる貨幣額をもつて表現されるわけであるが、いま一例をもつて説明すれば次の如くである。A國においては一〇單位のX商品が金一瓦に等しくB國においてはX商品一五單位が金一瓦に等しいとし、また、A國のX商品はY商品と三對二、B國のX商品はY商品と三對一の關係にあるとしよう。この場合、A國のY商品とB國のX商品とが等價にて交換されるとすれば、即ち二〇單位のY商品は等價形態にあるB國の三〇單位のX商品の使用價值量により表現されると同時に三瓦の金の表現する貨幣額によつて示される。同様に三〇單位のX商品はA國における二〇單位のY商品と等價形態にあるとともにB國における貨幣の相對的價值によつて金二瓦によつて表現される。かくして、かかる交換の結果、A國は得失なくB國は二瓦の金あるいは一〇單位のY商品を超過利得したことを考えられる。さてここで金一瓦はA國ではX商品一〇單位、B國ではX商品一五單位という夫々異なる相對的價值により表現されながらも、世界貨幣として作用するとき一般的等價物として現われるという關係があるのである。この場合明らかに勞働生産性の大なる従つて生産力段階のより、高い國はその低い國よりも利得することになるのであるが、一單位當り商品に對象化された價值は隠蔽され、使用價值量の問題としてのみ表現されているに過ぎない。

前掲木下氏の例解によつてみても、イギリスのランヤ、五四單位とポルトガルのブドー酒四八單位が等價にて交換しうるといふ時、イギリスのランヤ一單位を金一瓦で置き換えるとブドー酒四八單位を輸出することによつて一四瓦を利得することが出来るのである。

即ち、かくの如く、貨幣が世界貨幣としてその役割を貫徹する場合、國際交換の關係は超過所得の源泉としてのみ現象するという結果になり、國際間における搾取關係は隠蔽されてしまうのである(註5)。即ち「交換と商品生産との發展の最高度の生産物たる貨幣は、私的労働の社會的な特質を、個々の生産者間の、各集結した市場間の社會的な結び付きを隠蔽する」(註6)といった關係は國際間においてもこれを見逃すことはできない。(未完)

(註1) リカード「原理」岩波本一二六頁

(註2) 同上 三四六頁

(註3) J. Baby ; Principes Fondamentaux D'économie Politique, 1949, p. 142.

(註4) 「資本論」第一卷 高島譯一二二頁

(註5) 木下悦二氏「國際交換の諸法則について」(經濟評論昭和二十五年三月號)

(註6) ゲ・カズロフ編 米村正一譯「貨幣と信用」六四頁

#### 追記

本稿は價值の單純なる形態における國際交換の現象そのものの分析に中心がおかれておりその序論部分をなす。總過程における再生産構造の問題として、貨幣價值、爲替相場、資本移動、等々、具體的問題の分析を進めることは今のわれの意圖を遙かに越えるものであり、それまでに價值、市場價值、價格等の國際間における諸關係が論ぜられなければならないであろう。

(一九五〇・一・二八)